

野生動物との共生をめざして④

都市部における野生動物と人間の共存  
～札幌市における野生動物問題～



西区琴似から手稲山（標高1,024m）を望む。画面中央から左にかけての山すそに広がっているのが西区西野地区

北海道を代表する野生動物「キタキツネ、エゾシカ、ヒグマ」は道内の都市近郊に普通に生息しています。ここでは、札幌市におけるヒグマ事情を通して、野生動物とのつきあい方を考えます。

180万都市札幌にヒグマが棲む

平成13年9月札幌市西区西野市民の森でヒグマが出没し、連日マスコミの取材が続きました。「こんな近くにヒグマがいるなんて」、テレビに映された現場をみて、多くの市民がそう感じたに違いありません。

もし、自分の家の裏山にクマがやって来るとしたら、あなたは、どうしますか？

①引越し先を考える ②クマが棲む素晴らしい環境に感謝する ③危険回避策を考える

札幌市によるヒグマ巡視と出沒情報

西野市民の森におけるヒグマ出沒をきっかけに、札幌市では、市が管理する「市民の森」「自然歩道」を対象に、平成14年度から散策路の維持管理作業とともに、ヒグマのフン、足跡を確認し、記録報告するというヒグマ巡視を始めました。一定箇所を定期的に巡視した痕跡報告は、図のとおり毎年増加しています。巡視箇所では、ヒグマの出沒頻度が高まっていることがわかりました。

西野地区におけるヒグマ出沒状況と捕獲措置

西野地区では、平成13年以降、毎年8月下旬から9月にかけて、ヒグマが出沒しています。巡視による痕跡報告のほか、都市公園や市民菜園でフンや足跡が見つかりました。平成15年度からは、ヒグマの出沒が確認されるたびに、札幌市による追払い（大音響の出る玉を放ちヒグマを追払う）が行われました。

平成16年までは、周辺農地における顕著な被害はありませんでしたが、平成17年9月、トウキビとブドウがヒグマに食べられる被害（食害）

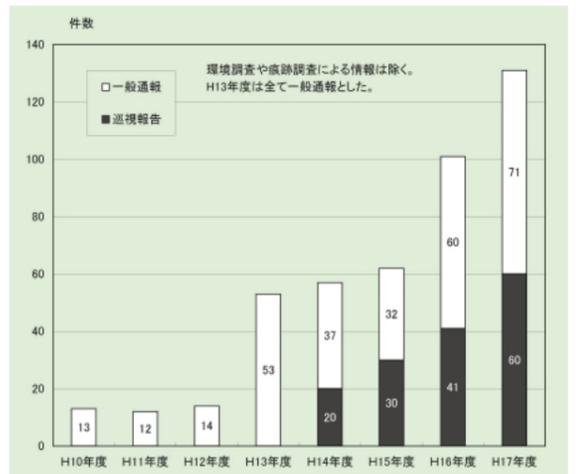
然の遭遇を避けるなどの対策が必要です。

電気柵であつてもササ刈りであつても、コストと労力がかかります。これらを敷地管理者等の当事者だけが負担するべきか検討が必要です。

もし、電気柵やササ刈り等をせずにいた場合、ヒグマと人の遭遇リスクが高まり、ヒグマが出沒するたびに、捕獲措置が必要になるかもしれません。最終的な捕獲のコストをかけるか、予防的措置である電気柵とササ刈り等にコストをかけるかが問題となります。

電気柵等の当事者負担を基本とすれば、自費で設置できる人とならない人が出てきます。電気柵を設置する場合は、必要な箇所について設置しなければ、全体的な危険管理の効果が期待できない可能性があります。当事者負担ではなく、地域負担がやはり原則なのではないかと思えます。ただし、この「地域」を、町内会などの自治会単位で行うか、区単位か、市単位か、これも議論が必要です。

ヒグマに限らずとも、野生動物と共存することは、お金がかかりすぎます。「自然豊かな都市」



ヒグマ出沒情報の推移（札幌市みどりの推進部みどりの管理課資料）

が発生しました。その後も、周辺の家庭菜園のトウキビが荒らされ、果樹園のナシやリンゴの木がなぎ倒されるなどの被害が続きました。札幌市は、被害を発生させているこのヒグマを「問題ヒグマ」と判断し、10月8日、西野地区の山林内において、捕獲のための箱ワナを設置しました。

札幌市のヒグマ安全対策

札幌市では、「ヒグマ出沒時の安全対策の手引き」を平成14年秋にまとめています。そこでは、人へ危害を及ぼす可能性があり、農作物や生ゴミ等に餌付している状態のヒグマを「問題ヒグマ」と定義し、これに該当するかを判断して対処するというものです。西野地区のヒグマはこの問題ヒグマと判断されました。

西野市民の森における調査

ヒグマによる被害が発生し捕獲措置にいたるまで、札幌市は、ヒグマの出沒をただ手をこまねいてみていたのではなく、出沒個体に関する調査を継続的に行っていました。

西野市民の森では、平成15年にヒグマ出沒要

を標榜するのであれば、野生動物と共存するための予算枠がしっかりと確保される必要があります。ヒグマについては、危機管理・安全管理として、地域で情報共有するための資金が必要で、また、野生動物管理として、調査や情報収集のための費用もかかります。

情報の共有と地域のコミュニケーション

西野地区では、平成14年以来、巡視によるヒグマの出沒情報の収集、出沒要因調査、個別調査と、ヒグマ調査が行われてきました。しかし、平成17年の食害を防ぐことができませんでした。調査の結果や、結果から予測されること、そのための対策についての情報を、関係する行政機関担当者で共有することができなかったのではないかと思います。

また、行政機関と地域住民の方々が、ヒグマの出沒情報はもちろん、ヒグマに関する知識や対策についての情報を共有する機会が必要だと思えます。ヒグマに対する考え方や感じ方には、知識や経験等によって、また、行政と住民という立場が異なれば、違いが出てくるのが当然ですが、現場の正確な情報を地域関係者が共有し、十分なコミュニケーションを図り、共通の目的をもつことによって、適切な対応策をみい出すことができるものと思えます。

平成17年西野地区の山林に設置した箱ワナには、結局ヒグマは掛からず、捕獲はなされませんでした。人が危害を受けず、ヒグマもまた自由を奪われずにする方策は、これまでの調査によって整理されると思います。それを、いかに実践に移すかが、今後問われてくると思います。

(株)ライブ環境計画 環境調査室長

井部 真理子



西野地区ヒグマ食害地点 住宅地に隣接している（筆者撮影）



自動撮影カメラで記録されたヒグマ（平成17年9月24日）  
（札幌市みどりの推進部みどりの管理課資料）



ヒグマ侵入防止の電気柵（筆者撮影）



平成14～17年の西野地区のヒグマ出沒地点



都市部において人とヒグマが共存すること

北海道では、ヒグマの餌となる植物が豊富にあり、奥山につづく森林であれば、そこはヒグマが利用しうる環境となります。都市部であっても、そのような森林は多く存在しています。都市部の場合、そのような森林を散策などで利用する人の数も多くなり、どうしてもヒグマと人が遭遇する確率が高くなります。森林を利用する人が十分な注意を払うという前提があつたとしても、住宅地に隣接する区域などでは、電気柵の設置による隔離や、ササなどの藪を刈り見通しをよくすることにより、ヒグマとの突

北海道の豊かな自然環境を構成するさまざまな生物たち、私たち人間の営みが拡大していくにつれて、狭められ分断されていった生態系。こうしたなかで今、さまざまな公共施設で、地球環境や身の回りの自然とのやさしい関係を再構築するための取り組みが始まっています。

このシリーズでは、野生動物に配慮した公共施設整備のあり方を探ります。